



私立女子美術学校創始者横井玉子の夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(9)「横井家文書」所収の横井左平太書翰から

メタデータ	言語: ja 出版者: 女子美術大学 公開日: 2023-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堤, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://joshihi.repo.nii.ac.jp/records/2000001

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



私立女子美術学校創始者横井玉子の 夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(9)

「横井家文書」所収の横井左平太書翰から

▶堤克彦

はじめに

このシリーズは、熊本大学附属図書館寄託の「横井家文書」所収の横井左平太・大平書翰27通をもとに、その紹介とその背景の解説を『女子美術大学紀要』第45号(2014年度)から始めている。

今回は、明治六(1873)年に伊勢佐太郎(横井左平太)が宿元(母上・つせ・多満・時雄・宮)に宛てた一通の書翰を取り上げる。この連名の宛名の中の「多満」の名がある。これは旧姓「原タマ」、左平太の妻となった「伊勢タマ」(横井玉子)の当て字である。左平太の書翰の中で、「多満」の名が出てくるのはこの一通だけである。

一、伊勢佐太郎書翰

○明治六(1873)年[1通]-左平太(29歳)		
23	A134	伊勢佐太郎書翰(在米、十月二十日)・宿元宛(母上・つせ・多満・時雄・宮)

1、【釈文】

316 Indiana Ave(まま、Ave[Avenue]大通り)
Washington D.C.

八月十六日御仕出之御状、去ル九日ニ相達候。難有奉拝見候処、先以時下御揃益御機嫌能被遊御座居、重疊恐悦之御儀ニ奉存上候。

二(つぎに)私儀何相替り候儀も無御座、依旧(依然同様・旧来通り)碌々(陸陸、碌々は当て字。平凡なさま、または満足の行くの意)消光(月日を過ごすこと)勉学仕居候間、乍憚御安心被成下候様奉願候。

却説(「却って説く」と読み、筆を改め、他の事を説くのに用いる。さての意)追々御状之趣キニ而ハ、御地モ當(明治六年)夏ハ例年ニナキ、強暑之由ニ而、嘸々(さざさぞ)御難儀被遊候事と、夫れ而巳遙々(遠くから)御察し申上候。

當地ハ例年ニ比シ候得ハ、少々ハ薄暑(初夏のやや汗ば

むような暑さ)ニ而、暮しよき方と申事ニ御座候得共、當府(ワシントン)ハ中々暑氣烈敷、何分七・八月之頃ハ難耐御座候間、私とも暫時新約克(ニューヨーク)近傍え避暑ニ罷越し、先月(九月)初に再ヒ當府之様ニ歸寓仕候。最早又當地ハ不遠大雪之時節ニ相成可申、実ニ當地不順之氣候ニハ殆ト(ほとほと)困り果て申候。然し當年ハ未タ霜モふり不申、殊之外暮しよき方ニ而、大仕合(幸せ)ニ御座候。

一、従四位様(細川[長岡]護美[もりよし、1842~1906])ニも(におかれても)益御機嫌克(よく)、先日より當地之様ニ御轉学被遊、當時ハ私御同居申上居、賑敷事ニ御座候。其外菅野(菅野覚兵衛、1842~1893、神戸海軍操練所生)杯モ當地え参り[候脱か]列(仲間・同僚の意)ニ而、同人ニハ先年神戸(神戸海軍操練所)以来之知人ニ而、追々夕景(夕方)杯ハ出會仕、いつも御地之御噂共仕候事ニ御座候。

従四位様ニも(におかれても)、来夏(明治七[1874]年夏)ハ早々歐羅巴(ヨーロッパ)之様ニ御渡り、同所え又タ一年計(ばかり)モ御滞学之思召ニて為在候間、御帰朝ハ多分再来秋(明治八年秋)ニモ相成可申カト奉存候。追々申上置キ候通、私ニも実ハ来(明治七年)夏より歐羅巴之様ニ渡り、同所え半ケ年計モ留学仕候而、願く[ハ脱か]来年中ニハ帰朝仕度存念ニ御座候得共、當時之御模様ニ而ハ、歐羅巴行ハ扱置キ、来夏マテ之當地留学モ甚タ無覚束、実ニ案勞之至ニ奉存候。

先日来當地留学生等ニも、御呼出し之御沙汰ニ付キ、既ニ一昨日當地日本公使館より先ツ三十六名丈ケ、帰朝之御発令ニ付キ、岩男俊貞氏ニモ、其内ニ而、今日ハ新約克出帆、帰朝ニ相成申候間、委細ハ同人帰着之上、當地之様子も直ト御聞とり可被成下候。同人え托し、写真其外色々さし上置キ候品モ御座候間、是れ又同人着之上御届ケ可申上奉存候。

當地留学生等ニモ、二十五才以上之五生ハ、總テ御呼戻し之御決議(帰国命令)ニ相成候由ニ而、私共ニモ、又不遠帰朝之達し可有之カト、最早決心罷在申候。程ニより候而ハ、来春までニハ、御目ニかゝり(まま、る)ヤも難計奉存居候。今便ニハ、色々申上度儀も山々御座候

得共、岩男出帆ニ付、彼是多事取り紛れ居候間、何も不能其儀、先ハ御返事旁、平安之段迄急キ相認め、何も余ハ後便ニ可申上候。あら々々 目出度可祝

1873 (明治六年)

十月二十日夜 伊勢佐太郎 (変名 横井左平太)

御母上様 (清子)
お津せ様 (小楠後妻、つせ子)
お多満殿 (伊勢タマ、横井玉子)
時雄殿 (小楠長男)
お宮殿 (小楠長女みや)

二白、次第ニ寒氣ニ赴キ、乍憚随分御保養御専一ヲ奉禱候。前文之通り、今便ニハ、又し而 (またして) 取紛り差し居、何方えモ封状仕出し不申、宜敷御傳声ニ (まま、被か) 成下候。先日 従四位様御一所 (まま、一緒) ニ写真ヲトリ候間、一枚さし上申上候。以上

Will you please (まま、please か) give my kind regard to Mr. Nonokuchi (野々口為志) and ather friends.

一、御封状ハ不相替御仕出可被成下候。若し万一私帰朝仕候ても、跡ニ而 公使館よりさし返し呉れ候様相談可仕候。

2、【読み下し】

316 Indiana Ave (まま、Ave [Avenue] 大通り)
Washington D.C. (District of Columbia、コロンビア特別区)

八月十六日御仕出しの御状、去る (十月) 九日に相達し候。有り難く拝見奉り候処、先ず以て時下御揃い益す御機嫌能く御座遊ばされ居り、重畳恐悦の御儀に存じ上げ奉り候。

二 (つぎに) 私儀何の相替り候儀も御座無く、依旧 (旧来通り) 碌々 (陸陸、碌々は当て字。満足の行くさま・平凡なさまの意、これまで同様平穩に) 「消光」(月日を過ごすこと) 勉学仕り居候間、憚り乍ら御安心成り下され候様願ひ奉り候。

「却説」(「却って説く」と読み、さての意) 追々御状の趣に

ては、御地も当 (明治六年) 夏は例年になき、強暑の由にて、嘸々 (さぞさぞ) 御難儀遊ばされ候事と、夫れのみ遙々 (遠くから) 御察し申し上げ候。

当地は例年に比し候得ば、少々は薄暑 (初夏のやや汗ばむような暑さ) にて暮しよき方と申す事に御座候得共、当府 (ワシントン) は中々暑氣烈しく、何分七・八月の頃は耐え難く御座候間、私ども暫時新約克 (ニューヨーク) 近傍へ避暑に罷り越し、先月 (九月) 初めに再び当府の様に帰寓仕り候。最早又当地は遠からず大雪の時節に相成り申すべく、実に当地不順の気候には殆と (ほとほと) 困り果て申し候。然し当年は未だ霜もふり申さず、殊の外暮しよき方にて、大仕合 (幸せ) に御座候。

一、従四位様 (細川 [長岡] 護美 [もりよし] 1842~1906、従四位下、知藩事護久の弟) にも (におかれても) 益す御機嫌克 (よ) く、先日より当地の様に御転学 (1873年 10月 15日 「ボストン」留学から「華盛頓」[ワシントン] に転学、1874年 4月 17日まで在学) 遊ばされ、当時は私御同居申し上げ居り (この書翰日付の十月二十日には、細川護美はワシントン留学中)、賑わしき事に御座候。其の外菅野 (菅野覚兵衛、旧名千屋寅之助 [ちや とらのすけ]、1842~1893、幕末の志士、坂本龍馬の海援隊の隊士、後に明治軍人。龍馬らとともに勝海舟の弟子となり、「神戸海軍操練所」に入所。妻は起美 [君江]、坂本龍馬の妻お龍の妹、龍馬とは義兄弟) 等も当地へ参る列 (仲間・同僚の意) にて、同人には先年 (元治元 [1864] 年 5月) 神戸 (神戸海軍操練所) 以来の知人にて、追々夕景 (夕方) 等は出会い仕り、いつも御地の御噂共仕り候事に御座候。

従四位様にも、来 (明治七 [1874] 年) 夏は早々欧羅巴 (ヨーロッパ) の様に御渡り (4月 21日にボストンを発し、英国留学を実施)、同所 (イギリス) へ又た一年計りも御滞学の思召しにて在り為され候間、御帰朝は多分再来 (明治八年) 秋にも相成り申すべきかと存じ奉り候。(実際は明治十二 [1879] 年 一月十日の帰朝)

追々申し上げ置き候通り、私にも実は来夏より欧羅巴の様に渡り、同所 (イギリス) へ半カ年計りも留学仕り候て、願わくは来年中には帰朝仕り度き存念に御座候得共、当時 (現在) の御模様にては、欧羅巴行きは扱置き、来夏までの当地 (コロンビア) 留学も甚だ覚束無く、実に案勞の至りに存じ奉り候。

先日来当地留学生等にも、御呼出しの御沙汰に付き、既に一昨日 (十月十八日) 当地日本公使館より先ず三十六

名だけ、帰朝の御発令(帰国命令)に付き、岩男俊貞氏(明治五〔1872〕年一月、細川護美の米国留学に同行、後述参照)にも、其の内にて、今日(十月二十日)は新約克(ニューヨーク)出帆、帰朝に相成り申し候間、委細は同人帰着の上、当地の様子も直と御聞き取り成り下さるべく候。同人へ托し、写真其の外色々さし上げ置き候品も御座候間、是れ又同人着の上御届け申し上げべく存じ奉り候。

当地留学生等にも、二十五才以上の五生(左平太当時29歳で該当者)は、総べて御呼戻しの御決議(帰国命令)に相成り候由にて、私共にも、又遠からず帰朝の達し之れ有るべきかと、最早決心罷り在り申し候。程により候ては、来春(明治七〔1874〕年春)までには、御目にかゝるやも計り難く存じ居り奉り候。(実際は約七か月後の明治七〔1874〕年五月十三日に帰国)

今便には、色々申し上げ度き儀も山々御座候得共、岩男出帆に付き、彼是多事取り紛れ居り候間、何も能わず、其の儀、先ずは御返事旁、平安の段迄急ぎ相認め、何も余りは後便に申し上げべく候。あらあら 目出度可祝。

1873(明治六年)

十月二十日夜 伊勢佐太郎(変名 横井左平太)

御母上様(清子)
お津せ様(小楠後妻)
お多満殿(伊勢タマ、横井玉子)
時雄殿(小楠長男)
お宮殿(小楠長女)

二白、次第に寒気に赴き、憚り乍ら随分御保養御専一を禱(いの)り奉り候。前文の通り、今便には、又して取り紛れ居り、何方へも封状仕出し申さず、宜敷く御伝声に成り下さる候。先日従四位様御一緒に写真をとり候間、一枚さし上げ申し上げ候。以上

Will you please (ま、please か) give my kind regard to Mr. Nonokuchi and other friends. (どうぞ私の心からの敬意を野々口〔為志〕氏と他の友人たちにお伝えください)

一、御封状は相替らず御仕出し成り下さるべく候。若し万一私帰朝仕り候ても、跡にて公使館よりさし返し呉れ候様相談仕るべく候。

3、【解説】

この書翰の形態は方眼のある紙を使い、筆記具はおそらく万年筆(fountain pen)でないかと思われる。文字は柔らかいが硬いタッチで書かれ、従来の羽ペンのようなインクの浸け足しが見られず、万年筆特有のインクの濃淡が見られる。すでに書かれてから149年も経っているのに、インク色の劣化がみられ、薄くなっているか、すでに消えかかっている、判読に苦慮する文字が多く見られる。

百科事典によれば、万年筆はすでに17世紀ごろから様々な工夫がなされ、1884(明治十七)年には、アメリカのL. E. ウォーターマンが毛細管現象を応用したペン先を發明して広く普及したという。この書翰は、11年前の1873(明治六)年10月に書かれたものであるため、様々な工夫がなされていた時期のものであったかもしれない。

この書翰は、すでに2014年4月3日発行の『横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立展図録』(女子美術大学)に収録されているが、その釈文では「帰光(消光)・「節説(却説)としていたので、()のように訂正していただきたい。釈文及びその背景については、本論を参考にされたい。

ついでながら、五人の宛名の敬称には「様」と「殿」が使用されている。江戸期には「様」と「殿」の使い分けがなされ、「様」は「殿」よりも身分が上か、目上の人に用い、尊敬

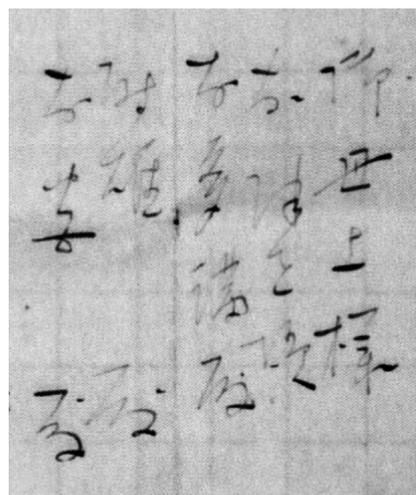


写真 書翰宛名原文



図 殿の字のちがい

氏名	記	事
奈良真志	主計総監	
菅野覚兵衛	少佐	
前田鎌吉		
平山太郎	中秘書、第五高等学校校長	
国友次郎	アナポリス卒 大佐	
吉井幸藏	少佐	
勝小鹿	アナポリス卒 少佐	
伊勢佐太郎	元老院権少書記官	
氏名	記	事
谷元兵右衛門	主計中監・東京株式取引所長	
松村淳藏	アナポリス卒	
高木三郎	同伸会社社長	
富田鉄之助	日銀総裁・東京府知事	
井上六一郎	東京大学法学部教授(良一)	
本間英一郎	鉄道局	
白峰駿馬	小匠司、明治十年免・造船業	
服部潜藏	大佐	

表 海軍官費留学生

の度合いが高かった。また「様」と「殿」のいずれも、そのくずし度合いによって、自分との上下関係が表わされていた。

写真の宛名は、前述したように不鮮明であるが、「御母上様」(清子)と「お津せ様」(小楠後妻)には「様」を用い、左平太には二人とも目上であるが、そのくずし方に違いがみられ、二人への対応の仕方の違いがみられる。

また「お多満殿」(伊勢タマ、横井玉子)・「時雄殿」(小楠長男)・「お宮殿」(小楠長女)には「殿」を用い、左平太のくずしはいずれも同じで、上図の③・④に該当、自分と対等とみなしていたことがわかる。

(1) 再渡米の目的と住所

この書翰の冒頭に「316 Indiana Ave(まま、Ave〔Avenue〕、大通り) Washington D.C.」の住所が記され、伊勢佐太郎(横井左平太)は再渡米後の1873(明治六)年10月20日には「ワシントンD.C.」に住んでいた。「アナポリス」—「ワシントンD.C.」間は約30km(20哩、32.2km)ほどしか離れていないが、一体その理由は何であったのか。

山崎正董著『横井小楠』伝記編によると、渡米中の左平太に「明治三(1870)年閏十月十三日、細川家より伊勢佐太郎(左平太の變名)に、小楠の參與勤仕中の勉勵に對し、家名取立て、毎歳八十二俵を与へらる旨沙汰あり」と記され、「家名取立て」(家督相続)が、熊本知藩事細川護久により許

されていた。そこで左平太は、1年後の明治四(1871)年十一月十九日に、「家名取立て」の手續ぎのため一時帰国し、その家督相続も無事完了している。

海軍歴史保存会編『日本海軍史』第1巻 通史(第1・2編)によれば、明治四(1871)年、まだ兵部省時代の海軍官費留学生(上表)の16人の中に伊勢佐太郎(横井左平太)の名がある。

その後の左平太について、高木不二著『幕末維新期の米国学留学—横井左平太の海軍留学』で補足しながら見ていきたい。明治五(1872)年六月二十三日には海軍省生徒となり、七月八日に海軍省派遣の留学生として再渡米することになった。

当然左平太は「アナポリス海軍学校」への復学を希望し、再渡米後は最初「ボストン」の近傍に留まって、「海軍学法」の修得に取りかかる「存念」で「勉強中」であった。ところが左平太は「アナポリス海軍学校」復学の断念を余儀なくされた。

高木不二氏はその著で、左平太が自らの語学力不足から、今後3年間の修学への不安を理由としているが、そればかりでなく、その背景には、帰国の間に、左平太の復学を困難にする「アナポリス海軍学校」の「法則改革」(学校修学規則編制)が行われ、明治四(1871)年から「六ヶ年ノ期限」に延長されていた。左平太は再渡米後初めてそのことを知った。

そのことを記した²⁶A131「伊勢佐太郎履歴」は、後の号で詳しく紹介するが、本号ではその一部を引用しておきたい。

一昨(明治五〔1872〕年)申秋七月八日、横濱出帆、同三十日桑港(サンフランシスコ)え着岸仕、其後暫「ボストン」近旁(傍)留学罷在、再ヒ海軍学法ニ取り掛り度存念ニテ勉強中ニ罷在候處、「アナポリス」学校モ昨年(明治四〔1871〕年)ヨリ法則改革ニテ、六ケ年ノ期限ニ相成候ニ付、晩学不才之身ヲ顧ミル(まま、ニ脱か)、再ヒ学校ニ謀リ、今ヨリ六ケ年之歲月ヲ費ンヨリモ、寧(むしろ)幼年之俊才ニ譲リ、責メテ実地之一科ナリトモ、聊カ奏寸功(すんこう、わずかの手柄。謙讓語)、他日 邦家・累世之鴻恩(大恩)ニ奉報、懇願之至リ候。

すでに「女子美術大学研究紀要」第51号(令和3年3月)の本シリーズ(7)所収の『元田永学関係文書』の追加①「伊勢佐太郎書翰」で見たように、「書生」(海軍生)は従来「アナポリス海軍学校」の四年間の在学で、学校卒業の「免許」(資格)を取れる規定であった。その四カ年の就業期間が「六ケ年ノ期限」に延長されていたのである。

左平太は学校側と掛け合って、今からまた六年間も再学することは、自分の「晩学不才之身」を顧みても到底不可能であり、それは「幼年之俊才」に譲って、自分は「責メテ実地之一科ナリトモ」修得して、わずかな「寸功」(てがら)を成し遂げ、将来「邦家・累世之鴻恩(大恩)」に役立ちたいとの願望を達成したいと思っていた。これは高木氏紹介の同年十二月四日付のフェリス宛の左平太書翰内容と同じであった。

左平太が「アナポリス海軍学校」の六年間修学を敬遠した理由には、確かに「晩学不才之身」云々を表向きの大きな事由としていたが、それよりも左平太には後述するように、すでに「原玉子」と結婚していたこともあったと推測できる。ついで²⁶A131「伊勢佐太郎履歴」では、つぎのように続ける。

幸ヒ旧(明治六〔1873〕年)冬、川村相輔(まま、同音による少輔の当て字 川村純義)殿、米国御通行ニ付、新約克(ニューヨーク)ニテ得拝謁、右之愚意ヲ述へ、若シ御聞届ケ被下候事ナラバ、何卒今ヨリ二ケ年ノ間留学被仰付候様、以書附、奉誓置キ候故、華盛頓コロンヒエ(ア)ン(コロンビアン)ノ大学校ニテ、海軍法律課ニ取掛り、勉学仕居候處、其後僅カニ三ケ月ノ

處ニテ、帰朝被仰付、学業未中途ニモ至リ不申候得共、直ニ奉命、去ル(明治七〔1874〕年)四月九日「ワシントン」ヲ辞シ、五月十三日横濱到着仕候。

すでに見たように、明治五(1872)年秋七月八日、再渡米した左平太は、九月二日サンフランシスコ着後は「ボストン」に留学、海軍学法の勉強中であった。高木氏紹介の同年十二月四日付のフェリス宛の左平太書翰では、「アナポリス海軍学校」への復学を断念していた。

その理由は前述した語学力不足即ち「晩学不才」云々であったが、さらに大きな理由は、左平太は到着後「アナポリス海軍学校」が四年制から六年制への「法則改革」を知り、再入学を諦めた経緯があった。

しかし左平太は「責メテ実地之一科ナリトモ」と決意し、「今ヨリ二ケ年ノ間」は「ワシントン・コロンヒアンの大学校」(ワシントンD.C.にある大学の意か)に留学して、「海軍法律科」を修得したいと考え、少なくとも明治六(1873)年十月以前(後述の高木調査により五月一〇日と判明)に、わざわざ「316 Indiana Ave〔Avenue〕Washington D.C.」に住所を移していた。

高木氏調査の「ボストン公共図書館英文史料」によれば、「左平太は一八七三年五月一〇日(ボストンから)ワシントンへ向かった。住所は五月二八日現在で、No 316 Indiana Avenue. Washington D.C.である」と一致する。

そこへ旧冬(明治六〔1873〕年十月)、欧米の海軍視察の際、川村少輔(川村純義 1836~1904、薩摩藩出身)が米国を通過した。その時、左平太は「新約克」(ニューヨーク)で川村に面会し、自らの決意を開陳し、「ワシントン・コロンヒアンの大学校」(ワシントンD.C.にある大学校)での二年間の留学を懇願したのである。

(2) 川村純義

川村少輔(川村純義)は、明治二(1869)年兵部大丞に任ぜられ、同三年兵学頭を兼務し、同四年兵部少輔、同五(1872)年二月に兵部省が廃止され、陸軍省・海軍省が成立すると、川村は海軍卿および海軍大輔が不在のまま、海軍少輔に任じられた。左平太が面会した時、川村純義は海軍少輔であった。

その後明治七(1874)年には、海軍ナンバー2である海軍大輔、海軍中將に任ぜられている。旧幕臣の勝海舟が海軍大輔、次に海軍卿になった経緯はあったが、それはただ象

微的存在にすぎず、薩長閥が主要ポストを握る中で、川村は海軍の実質的指導者として諸事を取り仕切ることになる。

いま少し川村少輔(川村純義)について見ていくと、「太政官御沙汰書拾遺」第五十九号には、海軍少輔河村純義(川村純義)は「壬申十一月(明治五〔1872〕年十一月)に、太政官より「壙國博覧會(明治六年五月一日～十月三十一日開催の「ウイーン万国博覧會)」に出張を命じられ、正院は十一月二十六日付で許可している。

田村栄太郎著『明治海軍の創始者 川村純義・中牟田倉之助傳』・伊藤之雄編著『維新の政治改革と思想——一八六二～一八九五』・中村孝也著『中牟田倉之助伝』などによって、川村少輔(川村純義)の「ウイーン万国博覧會」出張の経緯を見ておきたい。

川村少輔は明治六年二月一日に東京出発、四月三日マルセイユ着、ジュネーブ留学中の大山巖に出迎えられ、直ちにパリに向かい、「岩倉具視欧米使節団」に同行中の大久保利通に会う。六月にはスイスに行き、七月には「ウイーン万国博覧會」を見学、そこで病氣静養中の中牟田倉之助に会っている。

その後、川村少輔は八月にロンドンに渡り、英人教師雇入れ交渉と契約書の交換にあたり、また九月五日にロンドン入りした中牟田少将と合流して、軍事施設などを視察、九月十一日にはリバプールを出航、大西洋を横断して、おそらく九月中旬にはニューヨークに到着、どれくらいニューヨークに滞在したかは不詳であるが、サンフランシスコを経て、十一月に帰国している。

横井左平太はニューヨークに立ち寄った川村少輔に面会、少しく「愚意」を述べた後、書付を以て「若し聞き届け下されるならば、何卒今より二カ年間の留学で『海軍法律科』の修得を目指したい」と、その延長を請願したことはすでに述べた通りである。

その時期は旧冬(明治六〔1873〕年十月)であるが、この書翰を認めた「明治六(1873)年十月二十日」の数日前か、あるいは書翰の内容からして、十月二十日当日の昼間とも推定できるが如何。その時の川村少輔の対応の仕方が気になるが、おそらく左平太には余り反応がよくなかったと思えたのであろう。

それに基づいて、左平太は書翰に「来夏(明治七〔1874〕年夏)までの当地留学も甚だ覚束無く、実に案勞の至り」と判断し、その不安な気持ちを吐露したのではないか。即ち川村少輔は左平太の切なる請願を認めなかった。おそらく

日本政府が日本人留学生の帰国方針を決定し、すでに開始していたため、例外を認めなかったものと思われる。

左平太は具体的に「先日来当地留学生等にも、御呼出しの御沙汰に付き、既に一昨日(10月18日)当地日本公使館より先ず三十六名だけ、帰朝の御発令」が出て、その中に「岩男俊貞(39歳)もいたと記し、その岩男は「今日(10月20日)は新約克出帆、帰朝に相成り」と認めていた。

左平太の不安は的中した。前の「三十六名」の中には左平太の名はなかったが、その後「僅か三カ月(明治七年一月頃か)後に帰朝を命じられた。左平太の川村少輔への必死の請願は、ついに反故となって実現されなかった。そして左平太は未だ学業の中途にも至っていなかったが、仕方なく命令に応じ、明治七(1874)年四月九日に「ワシントン」を辞して、五月十三日に横浜港に到着することになる。

二、左平太と玉の結婚

1、左平太の縁談話

この書翰の宿許五人の宛名は「御母上様・お津せ様・お多満殿・時雄殿・お宮殿」であり、その中に「お多満殿」の名があった。言うまでもなく左平太の妻となった「伊勢タマ」(以下「横井玉子」と称す)であった。まず左平太と玉子の結婚の経緯について見ておきたい。

この両者の結婚の経緯には不詳なところが多い。ただ左平太の縁談話は玉子が最初ではなかった。それ以前のあったことを紹介しておきたい。

山崎正董編著『横井小楠』遺稿編所収の小楠書翰199は、京都に召命されたばかりの小楠が、明治元(1868)年五月十日付で「宿許へ」送った書翰である。その書翰はアメリカ留学中の左平太に「一寸立帰り(一時帰国)仕り候様申越し候間」の一文から始まっている。

その中に「一、新堀(下津休也)むすめ、久馬(休也の嫡男)・山形(典次郎、休也の弟)にも能々相談に及び候処、何(いずれ)も存寄り(別の意見)御座無く、至極同意に御座候へば、隠居(休也)夫婦も子細御座有る間敷く、都合次第にて、いつ何時も(いつの強調、何時でも)御呼び取り(呼び迎える)成られ置き候て然るべしと存じ奉り候。尚御許にて御相談成られ度き事」の一項目がある。

この文言では、下津家では長男も休也の弟も隠居(休也)夫婦も何の異存もなく、完全同意であるとの記述から、どうしても左平太(24歳)と新堀むすめ(年齢不詳)との縁談話

と進めたいと読みとれる。

ところが、小楠は「痲疾」に罹患、数多の書翰で、その「痲疾」が一進一退を繰り返す様子が認められている。六月にはかなり重篤な状態になり、小楠自身苦痛に耐えていた。その様子については、熊本近代史研究会『近代熊本』第40号(2019年)所収の拙論「二種類の『小楠遺表』—小楠の『痲疾』罹患と『遺表』の背景—」を参照されたい。

なお小楠の「痲疾」については、山崎正董述の小冊子『横井小楠先生を偲びて』(熊本縣教育委員会、1949年)「三小楠先生の生涯」では、所謂「性病」ではなく、「先生の病氣は腎臓及び尿路の結核」と診断をしている。

その後明治二(1869)年正月五日には「小楠暗殺事件」が起こってしまった。また左平太自身の一時帰国もままならなかったこともあり、この縁談話はたち切れになったと思われる。

2、原玉子の出自と左平太との結婚

「高瀬藩」はもともと「新田藩」として、江戸に創設された肥後の小藩であった。原家は代々家老職(280石)で、参政と奉行職・砲術師範を兼務していた。原玉子(タマ)の「除籍簿」などによれば、嘉永七(1854)年九月十二日、原三右衛門尹胤(コレタネ)・関(セキ)夫婦の次女として、江戸築地鉄砲洲の高瀬藩邸で生まれている。

明治元(1868)年三月、第十代藩主細川利永の「江戸引き払い」により、家臣共々玉名郡高瀬町岩崎原(現・玉名市高瀬)に転住することになった。その時玉子は15歳の娘であった。

中川斎著『肥後高瀬藩史』(1969年)によれば、高瀬藩の家臣で「熊本洋学校」に入学した人物には、阪井貞保・両角政之・三友雄・鈴木万・米野信実・伊勢某の6人がいた。明治八(1875)年七月の「熊本洋学校生徒学科試験各科比較席順表」には、そのうち三友雄・両角政之・鈴木万・坂井禎甫(阪井貞保と同人)の4人の名は見出せるが、米野信実・伊勢某の名は見当たらない。

このうち米野信実は学科試験を受けていなかったのか、あるいはそれ以前に退学していたとも考えられる。一方この「伊勢某」即ち「原玉子」(伊勢タマ)は女性であったので、この試験が受けられなかったのかもしれない。しかし「伊勢某」と伊勢姓を名乗っていることは、「熊本洋学校」在学中にすでに左平太と結婚していた証となる。

左平太は明治四(1871)年十月九日、左平太は帰朝の命を

受け、紐育(ニューヨーク)を出航、太平洋横断航路で、十一月十九日に帰朝した。暗殺された叔父小楠に替って家督を相続するためであった。

「熊本洋学校」は、明治四(1871)年九月一日、横井大平の尽力によって、アメリカの退役軍人L.L.ジェーンズを招聘・開校し、日本最初の「男女共学」を実施していた。左平太が帰国する約二カ月半以前であった。

左平太(28歳)と原タマ(19歳)は、左平太の帰国中(明治四年十一月から明治五年七月までの間)に結婚したと推定されるが、両者がどのようにして知り合い、結婚に至ったのか、その経緯は今のところ定かでない。

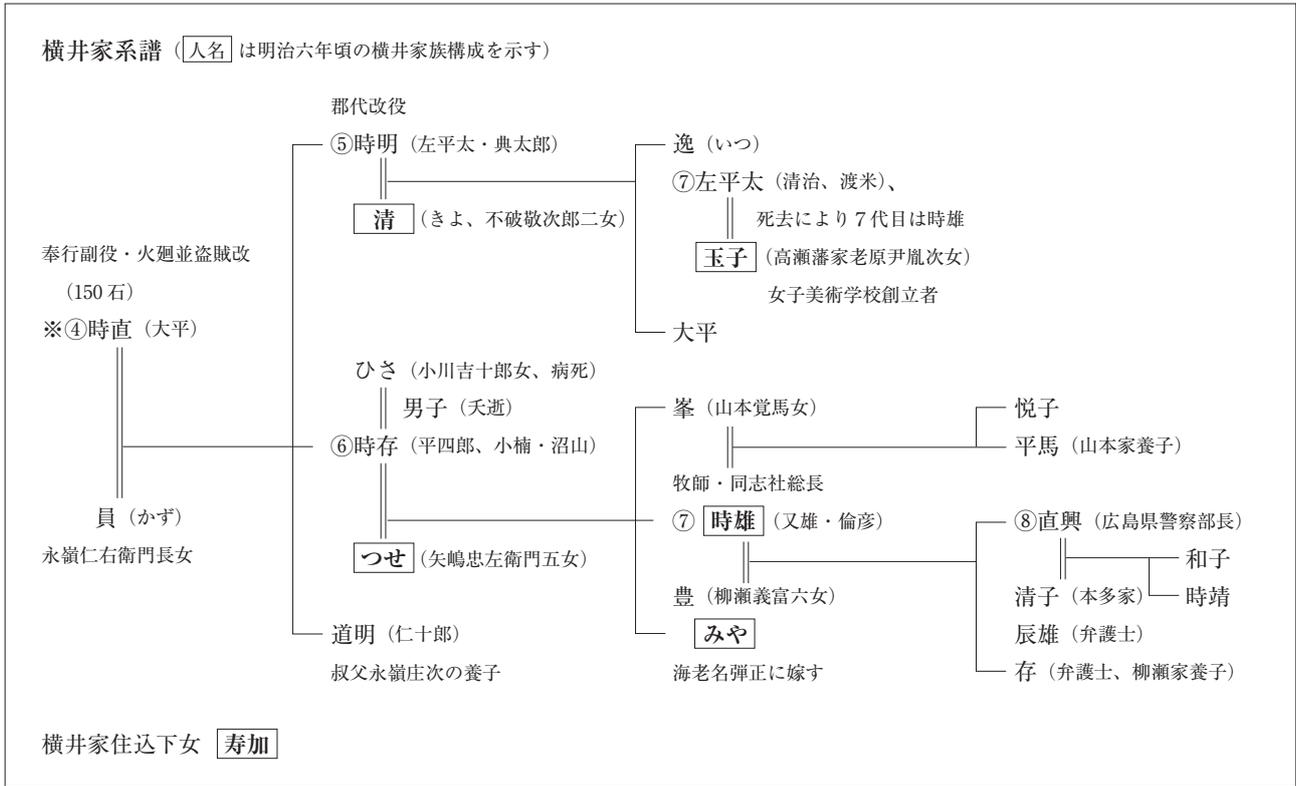
ただ「熊本洋学校」には、明治五(1872)年十一月に徳富初子(徳富蘇峰・蘆花の姉、湯浅治郎夫人)、同八(1875)年に横井みや子(1862~1962、当時14歳、小楠の娘、海老名弾正夫人)が入学している。その時期に「伊勢某」(横井玉子、私立女子美術学校の創設者)の名で在学していた。彼女らはL.L.ジェーンズから男子に交じって英語を学び、ジェーンズ夫人から西洋料理などを学んでいた。

徳富初子(1860~1935、当時13歳)は明治五年十一月以前に入学したが、原タマ(1855~1903、当時18歳)はすでに在学していた。おそらく明治四(1871)年九月の「熊本洋学校」開校直後に入学したと考えられる。

徳富久子は蘇峰・初子の保護者として「熊本洋学校」に関心があり、開校と同時に出入りし、いち早く入学していた原タマに関心を持ち、すでに面識もあったのかもしれない。世話好きの久子には、かつて横井小楠とつせ子の縁談を積極的に奨め、ついに結婚させた経緯があった。その久子が、今度は小楠の甥左平太と玉子の縁談話を切り出し、とんとん拍子で挙式まで進めたとしても、久子ならば何の不思議もない。

勿論左平太と玉子の結婚には、玉子の父原尹胤や母セキの許可が必要であっただろうが、この原尹胤は男爵を辞退したほどの気骨ある進歩主義者であり、おそらく小楠の在江戸のころから面識があり、小楠が暗殺されたとはいえ、小楠の甥であればと、二人の結婚を許したものと思われる。

原タマは、左平太との結婚後「伊勢某」(横井玉子)として、夫左平太の明治五年七月八日からの再遊学後も、すでにみたように徳富初子・横井みや子と一緒に「熊本洋学校」に在籍し、英語ばかりでなく、L.L.ジェーンズ夫人から西洋料理や洋裁などを習っていた。



3、横井家に住む玉子

再遊学した左平太は新妻の玉子を置いて、明治五年七月八日に横浜出航、同年八月三十日、桑港(サンフランシスコ)に到着した。その後の経緯はすでに紹介しているので、結論のみを記すと、再渡米後は「華盛頓」(ワシントン)の「コロヒアの大学校」(ワシントンD.C.にある大学校)に入学するために、「海軍法律科」の課業を勉強していた。

この明治六(1873)年十月二十日付の書翰はその時のもので、宿許宛ては「御母上様・お津せ様・お多満殿・時雄殿・お宮殿」の連名となっている。

同居の「御母上様」(当時53歳。1821~1900、享年80歳)は横井小楠の兄時明の妻、逸・左平太(時治)・大平(時実)の母きよ(清)であり、「お津せ様」(43歳)は矢嶋忠左衛門の娘(矢嶋四賢婦人の一人)で、横井小楠の後妻つせ子、時雄・みやの母であった。

「お多満殿」(19歳)は、「伊勢某」即ち左平太の妻「伊勢玉子」で、後に「私立女子美術学校」を創立する。この書翰から、左平太の再渡米後、横井家の家族の一員として同居していたことがわかる。「横井家系譜」では、明治六年頃の横井家の同居人名を□で示してみた。

また「時雄殿」(17歳)は横井小楠の息子で、後に牧師・第三代同志社大学総長となり、「お宮殿」(12歳)は横井小楠の娘で、海老名弾正(牧師・第八代同志社大学総長)の妻となっている。この他に長年横井家の下女寿加(1827~?、当時47歳か)がいた。

この宛名の五人と下女(家事手伝)の寿加は、明治六(1873)年十月二十日頃「熊本洋学校」からすぐ近くの熊本

城下の古城堀端に居住していた。なお人名後の()は当時の年齢である。

三、書翰の登場人物

1、「従四位殿」・「岩男俊貞」と同居

この書翰は、明治六(1873)年八月十六日の宿許からの書翰が去る十月九日に到達し、有り難く拝見したこと、「時下御揃い益す御機嫌能く」「重畳恐悦」と、在熊の横井一家の無事を喜び、左平太自身は再渡米後「何の相替り」もなく、いつも通り邁進し、満足のいく勉強の日々であるので「安心」してほしいと書き始めている。

次いで熊本県の今年の夏は「例年になき強暑の由」で、「嘸々(さぞさぞ)御難儀」と推察し案じ、「当地」(ワシントン)は例年に比べ、「少々は薄暑(初夏のやや汗ばむくらいの暑さ)にて暮しよき方」のようであり、「当府」(ワシントンD.C.)は「中々暑気烈しく、何分七・八月の頃は耐え難く」と、明治五(1872)年七月八日の再渡米後に体験した暑さの実感であろう。

そして「私ども」(左平太と「従四位様」[細川護美]と岩男俊貞、菅野覚兵衛を含む)は、しばらく「新約克」(ニューヨーク)近傍に「避暑」に行き、先月(九月)初めに再び「当府」(ワシントンD.C.)に「帰寓」し、そこからの発信である旨を記す。

さらに最早又当地は遠からず「大雪の時節」になるようで、実に当地の「不順の気候」には殆ど(ほとほと)困り果てている。しかし当年(明治六[1873]年)は未だ霜もふっていない

ので、「殊の外暮しよき方」で「大仕合」(幸せ)である。

この後、左平太は前の「私ども」のうち、「同居」人に「従四位様」〔細川護美〕の名を記し、つぎのように続けている。

従四位様(細川〔長岡〕護美〔もりよし〕1842~1906
従四位下、知藩事護久の弟)にも益す御機嫌克(よ)く、
先日より当地の様に御転学遊ばされ、当時は私御同居
申し上げ居り、賑わしき事に御座候。其の外菅野(菅野
覚兵衛)等も当地へ参る列(仲間)にて、同人には先年
神戸(神戸海軍操練所)以来の知人にて、追々夕景(夕
方)等は出会い仕り、いつも御地の御噂共仕り候事に御
座候。

2、菅野角兵衛

インターネットによれば、菅野覚兵衛(1842~1893)は土佐国安芸郡和食村生まれ、旧名千屋寅之助(ちやとらのすけ、享年五十二歳)、幕末の志士で坂本龍馬の海援隊の隊士であった。龍馬とともに勝海舟の弟子となり、「神戸海軍操練所」に入所。妻は起美(君江)、坂本龍馬の妻お龍の妹で、龍馬とは義兄弟である。

明治二(1869)年、親友の元海援隊士白峰駿馬と共に渡米し、アメリカ・ニュージャージー州のラトガース大学に留学していた。左平太は明治七(1874)年四月九日に「ワシントン」を辞しているが、菅野も同七年に帰国している。(表「海軍官費留学生」参照)

その後菅野は海軍省に入り、艦政局運輸課長、鹿児島造船所次長・横須賀鎮守府建築部長等を歴任、明治九(1876)年に海軍少佐に任ぜられた。薩長の出身者や他の主要な海援隊士に比べ不遇に終わり、同二十三(1890)年海軍省を辞職した。

3、細川護美のワシントン転学日

高木氏調査の「ボストン公共図書館英文史料」によれば、「従四位様」(細川護美)が、「ボストン」留学から「華盛頓」(ワシントン)に転学してきたのは一八七三年の「九月二九日」で、護美がワシントン留学中の「住所同じインディアナ通り三一六」となっていた。

細川護美が「ワシントン」に留学した当初(後述の『長岡雲海公傳』では一八七三年十月十五日と記す)から、左平太と「同居」しているように思われる。両者には15日前後の違いがある。

この書翰では、「先日より当地の様に御転学遊ばされ、当時は私御同居申し上げ居り賑わしき事に御座候」と記されている。左平太の「先日」の使い方は、同書翰には「先日来當地留学生等二も、御呼出し之御沙汰」もあり、「数日前」(六日程前)の意と解される。

『長岡雲海公傳』に「ボストン」留学から一八七三年十月十五日に「華盛頓」〔ワシントン〕に転学、一八七四年四月十七日まで在学と記す。即ち書翰の「先日より当地の様に御転学」の「先日」は一八七三年十月十五日と考えられる。

そうすると、左平太と細川護美の「同居」日は、高木氏紹介の「ボストン公共図書館英文史料による細川護美のワシントン留学中の住所「インディアナ通り三一六」は、おそらく一八七三年十月十五日後ではないかと思われるが如何。

この書翰の「当時」(明治六〔1873〕年十月二十日)には、細川護美はワシントン留学中で、左平太の書翰通り「従四位様」(細川護美)と「同居」していて「賑わしき事」であった。また「二白」の「先日従四位様御一緒に写真をとり候間、一枚さし上げ申し上げ候」云々は十分その証拠になる。

その外「菅野」(菅野覚兵衛)等も前述したように、当地に遊学する列(仲間・同僚の意)で、同人は先年「神戸」(神戸海軍操練所)以来の知人にて、追々「夕景」(夕方)等は出会い、いつも「御地」(熊本県)の噂などをしていると記す。

書翰の「菅野杯モ當地え参り〔候脱か〕列ニ而」と「追々夕景(夕方)杯ハ出會仕、いつも御地之御噂共仕候事」からすると、菅野は明治二(1869)年のニュージャージー州の「ラトガース大学」留学以後、左平太の住む「当地」即ちワシントンD.C.の方に留学先に変え転居していたのか、それとも「当地」はアメリカを指し、ニュージャージー州からワシントンD.C.に遊びに来ていたかのいずれかであろう。後者と思うが如何。

その「従四位様」(細川護美)は、「来夏」(明治七〔1874〕年夏)には、早々「欧羅巴」(ヨーロッパ)の方へ渡り、そこにまた一年計りの滞学を考えているので、細川護美の帰朝は多分「再来秋」(明治八〔1875〕年秋)になると思われる。

左平太自身も「実は来夏(明治七〔1874〕年夏)より欧羅巴」に渡り、そこで「半カ年」(半年)計り留学して、願わくは来年(明治七〔1874〕年)中には帰朝したい「存念」であった。しかし「当時」(現在)の状況では、「欧羅巴行き」は扱置き、「来夏」までの「当地留学」も甚だ覚束無く、実に案勞の至りであると記している。

先日来「当地留学生等」にも「呼出し」の沙汰があり、既

に「一昨日」(十月十八日)に、「当地」(ワシントン)の「日本公使館」より、先ず「三十六名」に「帰朝の御発令」(帰国命令)があった。その中に「岩男俊貞氏」(当時39歳)が含まれ、「今日」(十月二十日)に「新約克」(ニューヨーク)を出帆、帰朝するので気忙しいと記す。

そして「委細は同人帰着の上、当地の様子も直と御聞き取り」してほしい。同人に托し、写真其の外色々さし上げ置き候品」もあり、「同人着の上御届け」になると報知している。

4、細川護美の米・英留学の経緯

すでに見たように、『長岡雲海公傳』巻三「第九章 洋行時代」によれば、長岡護美(細川護美、以後細川護美とす)は自費米国留学を思い立ち、明治五(1872)年一月二十日に横浜港を出航、四月一日に「紐育」(ニューヨーク)に到着していた。

それから細川護美は明治五(1872)年四月十八日より十月十八日までニューイングランドの「コネクチカット」(コネティカット)州の「ニューゼルシー」(New Jersey、ニュージャージー)に留学、十月二十七日より翌六年九月二十九日まで「マッサチューセット」(マサチューセッツ)州の「ボストン」に留学、そして同年十月十五日より翌七(1874)年四月十七日まで「華盛頓」(ワシントン)留学をしていた。

左平太の明治六(1873)年十月二十日付の書翰通り、護美はワシントンに来て「同居」していたが、左平太が翌七(1874)年四月九日に帰国のために「ワシントン」を出航、その約10日後に細川護美は渡英することになる。

前掲の『長岡雲海公傳』(巻三)の「第九章 洋行時代」には、岩男俊貞の名は一切出てこないが、この書翰には細川護美の名と共に岩男俊貞の名が記されている。後述するように、細川護美の米国留学には、岩男俊貞と弟の岩男三郎が従者として渡米したが、その後岩男三郎は兄俊貞とは別行動を取るようになる。

細川護美は、明治七(1874)年四月十七日まで留学の「華盛頓」(ワシントン)から、4日後の四月二十一日にはボストンを発し、英国留学を実施している。そして同年五月四日にリバプール着、六月十二日より明治八年十一月十日まで「クロイトン」(クロイドン〔Croydon〕、ロンドン府の南端)留学、同十一月二日から明治十一(1878)年まで「倫敦」(ロンドン)留学、専ら法学を修め、秋に「ミッドルテンプル」(ミドル・テンプル、法曹界の聖地)で「法学状師(ハリストル)

の学位」を取得した。その冬帰途につき、翌十二(1879)年一月十日に帰朝している。まる7年にわたる留学であった。

細川護美のイギリス留学中の動向については、次号で紹介する伊勢佐太郎宛(在東京、六月、元老院権少書記官任命)の「④A138長岡護美書翰 July 20th 1875」(在英、書翰は五月十八日投函)に詳細な記述があるので、そちらに譲ることにして、ここでは岩男俊貞に関する「長岡護美書翰」の一部を紹介しておきたい。

5、岩男俊貞の帰国

岩男俊貞(1836~1883、内蔵允。洋学者、洋学校教師。後に立憲自由党・公議政党建立委員)は、横井左平太・大平と共に、勝海舟塾・神戸海軍操練所に入所した友人かつ同志であった。また明治四(1871)年には、大平から「熊本洋学校」創設の相談を受けている。その後同五(1872)年二月(ま、一月か)に、フルベッキの紹介で細川護美の従者として渡米していた。

前述したように、細川護美の明治五(1872)年一月の米国留学には、岩男俊貞・弟岩男三郎が同行していた。高木不二氏によれば、弟岩男三郎は渡米後すぐに別行動をとり、1872年から73年まで、国友次郎と共に「モリソン・アカデミー」の古典科、さらに1873年12月にはコネチカット州の「エール大学」に入学している。

岩男俊貞は明治五(1872)年四月にニューヨーク到着後も細川護美と行動を共にした。但し寄宿先は違っていた。細川護美は十月にボストンに転居(ボストン コロンブス通り三七七番)するが、岩男俊貞は十月二日にニューヨークに転居(ニューヨーク ブルックリン セントフェリックス通り 一四一)し、両者は別行動をとっていた。

その後細川護美だけが、明治六(1873)年九月二十五日にワシントンに転学し、左平太と同居することになるが、岩男俊貞はニューヨーク ブルックリン セントフェリックス通り 一四一のままであった。おそらく左平太はニューヨークの岩男俊貞と連絡を取り合っていたと思われる。

その岩男俊貞に帰国命令があり、明治六(1873)年十月二十日に新約克(ニューヨーク)出帆して帰朝、左平太にも帰国命令が届き、翌七(1874)年四月九日に帰国のために「ワシントン」を出航した。細川護美は、二週間後の四月二十一日にボストンを発し、「単身英国留学」を実行した。

細川護美の「単身英国留学」は、この書翰のように「従四位様にも、来夏(明治七〔1874〕年夏)は早々欧羅巴(ヨーロ

ツパ)の様に御渡り、同所へ又た一年計りも御滞学の思召しにて在り為され候間、御帰朝は多分再来秋(明治八年秋)にも相成り申すべきかと存じ奉り候」とあり、少なくとも明治六(1873)年十月二十日の段階ではかなり具体化していた。

ただ細川護美の「単身英国留学」のことは左平太が知っているくらいだから、当然岩男俊貞にも話していたと思われる。岩男俊貞は細川護美の決断に同行者として動揺しながらも同意し、同時に残された場合の米国留学の費用などの問題に直面する懸念も大きかったであろう。しかし前述のように、岩男俊貞は明治六(1873)年十月二十日には帰国してしまった。

それから一年半後の明治八(1875)年五月十八日付のイギリスからの「長岡護美書翰」(伊勢佐太郎宛在東京、六月、元老院権少書記官任命)には、岩男俊貞への思いを、つぎのように記している。

岩男氏も無事勉学、素より僕獨今ながら、同人ニ圖事(はかりごと、懸念する事)等出来候節は、重畳世話いたし候間、御安心可被下候。僕即今態とあまり出會不仕、しかし僕ノ意ハ、賢兄(左平太)能く知て、決而到底彼人(岩男俊貞)ニ對し、兎角之存意無之、此段ハ御面會之上、御一笑可被下候。

しかし俊貞先生等へ萬一彼眼前之了解を以而、兎角之通信等有之候而は、僕の本意ニ無之候間、賢兄御合置可被下候。帰朝之上笑ニ崩し候筈ニ御坐候。僕よりハ更ニ関係いたし不申候間、此段ハ他日友人等之談話ヲも御聞取可被下候。

何様昨年(細川護美書翰の發送日付は「July 20th 1875」なので、明治七〔1874〕年にあたる)別途費用相わたし候後、今更僕より別途相わたし候も、すこしく名義相立不申候。殊ニ當人自費ニ而、一トシメ(一締め)苦慮いたし候節、他日之為と相考候次第も有之、御呈察可被下候。

何様此上ハ彼人の望候丈、滞英勉学可然相考へ申候。しかし僕の獨立ハ深き意中有之候間、必御安心可被下候。

この書翰の内容は、細川護美が「単身英国留学」後、岩男俊貞に何か「圖事」があれば重ねて世話をするが、いまは「出會」するつもりはないと記す。「単身英国留学」の意志の固さは左平太が一番よく知っているだろう。別に岩男俊貞に「兎

角之存意」(別に思うところ)があるわけではない。こんな自分の行動については二人で「一笑」されても結構である。

しかし今更岩男俊貞に直接会って「了解」してもらった後で、「兎角之通信等」(何やかやの遣り取り)は「本意」ではないことも、左平太には知っててもらいたい。真相を明らかになれば「笑ニ崩し」になるであろう。差し当たって岩男俊貞との関係を修復する考えはないし、その理由は「友人等之談話」でも十分納得ができるであろう。

岩男俊貞には「昨年」(明治七〔1874〕年)に「別途費用」を渡しているの、再度「別途」に金を渡すことは名義が立たない。岩男俊貞も「自費」で賄い、それなりの「苦慮」をすることは「他日之為」(今後のため)になると考えている。この次第をわかってほしい。

細川護美は今後「彼人(岩男俊貞)の望候丈、滞英勉学可然」と考えていて、その滞英費用の面倒は見るともっている。自分の「単身英国留学」の「深き意中」(決意)については大丈夫だから安心してほしい。

しかしながら、どうも細川護美は同行者の岩男俊貞をそのままに「単身英国留学」を実行したことを、人知れず悩み続け、脳裏から離れなかったようである。岩男俊貞も同行者として滞米中の費用全額を細川護美に依存していたとも読み取れる。そこで細川護美は最も気心の知れた左平太に、その偽らざる胸中を聞いてもらいたかったのであろう。この書翰を認めた一つには、左平太に岩男俊貞への対応とその理由を聞いてもらうことにあったものと考えられる。

ついでながら、江戸期であれば、左平太・岩男俊貞にとって、肥後藩主家系の主人格にあたる細川護美が、明治になると、この書翰のように、兩人に対して同列の者として対応する文言の使い方に、時代の変化を感じた。私の深読みであろうか。

四、「文末」と「二白」(追伸)

前文の通り、今便には、又して取り紛れ居り、何方へも封状仕出し申さず、宜敷く御伝声に成り下され候。先日從四位様御一緒に写真をとり候間、一枚さし上げ申し上げ候。以上

Will you please (まま、please か) give my kind regard to Mr. Nonokuchi and ather friends.(どうぞ私の心からの敬意を野々口〔為志〕氏と他の友人たちにお伝えください)

一、御封状は相替らず御仕出し成り下さるべく候。若し
万一私帰朝仕り候ても、跡にて公使館よりさし返し呉れ
候様相談仕るべく候。

文末で、左平太は「当地留学生等」の「二十五才以上の五
生は総べて御呼戻しの御決議」となり、「私共」(左平太を含
めた「五生」、具体的には不詳であるが、当時32歳の菅野覚
兵衛も含まれていたかもしれない)にも「遠からず帰朝の達
し」があると、29歳の左平太は「御決議」の年齢に該当す
るので、最早覚悟し「決心」している。

左平太は「程により」(場合によっては)、「来春」(明治七
〔1874〕年春)までには「御目にかゝりやも計り難く」と、そ
の時期は不確定ながら、確実に帰朝することになると記す。
さらに今便では色々申し上げたいことが「山々」あったが、
ニューヨークからの「岩男俊貞」の出帆と重なり、「彼は多事
取り紛れ」、何も書けなかった。「其の儀」(左平太の置かれ
ている現状)を「返事旁」、「平安の段迄」(無事なこと)を取
り急ぎ認めたが、後は後便でと結んでいる。

そして「二白」(追伸)では、次第に寒くなるので、「随分御
保養御専一」と袴(いの)っている。また前文の通り、今便は
「又して取り紛れ」てしまい、何方へも封状を出さなかつたの
で、宜しく「伝声」してほしい。「先日従四位様御一緒に写真
をとり候間、一枚さし上げ申し上げ候」と追記している。

さらに“Will you please (まま、please) give my kind regard
to Mr. Nonokuchi and ather friends” (どうぞ私の心からの
敬意を野々口氏と他の友人たちにお伝えください)の英文
で締め括る。

最後に、左平太宛の「御封状」はこれまで同様「御仕出し」
されたい。若し万一私が「帰朝」して、行き違いになつても、
後で「公使館」よりさし返し呉れるように相談しておきたい
とも記している。

おわりに

この明治六(1873)年十月二十日付の㉓ A134「伊勢佐太
郎書翰」は、宿元の母上・つせ・多満・時雄・宮宛てのもの
で、その中に「多満」(伊勢タマ、横井玉子)の名があった。
横井小楠暗殺後、左平太は横井家の家督相続のために一時
帰国し、その時「多満」と結婚、左平太が「海軍省生徒」と
して再渡米後、「多満」は横井家の一員として同居していた
ことを証明する唯一の書翰である。また左平太と「多満」と

の結婚の経緯については、徳富久子の介在が十分考えられ
ることも紹介しておいた。

左平太の帰国中に「アナポリス海軍学校」の「法則改革」
があり、四年制から六年制に変更されていたため、復学を
諦め、「華盛頓コロンヒアの大学校」(ワシントン・コロ
ンヒアの大学校、ワシントン D.C. にある大学)に留学し、
「今ヨリ二ケ年ノ間」に「海軍法律科」の修得を決意し、す
でに「316 Indiana Ave [Avenue] Washington D.C.」に住所を
移し、勉学に勤しんでいた。

そこに明治五(1872)年一月に米国留学してきた細川護美
が、いくつか留学先を変えながら、翌六年九月二十九日には
「ボストン」に留学、そして同年十月十五日には「華盛頓」(ワ
シントン)留学にし、左平太の宿に「同居」していた。その
記念として「従四位様」との写真が一枚同封されていた。

細川護美と岩男俊貞に関しては簡単な紹介に止めたが、
細川護美については、次号で取り上げる㉔ A138「長岡護美
書翰」(在英、明治八年五月十八日)・伊勢佐太郎宛(在東
京、六月、元老院権少書記官任命)で詳しく紹介したい。

この書翰の後半では、日本公使館は「当地留学生等」のう
ち「二十五才以上」の者に「帰国命令」を出し、当時29歳の
左平太も該当しているので、「遠からず帰朝の達し」があると
覚悟している。おそらく33歳の菅野覚兵衛も該当してい
た。また39歳の岩男俊貞は、それ以前の「当地日本公使館
より先ず三十六名」に含まれていた。

左平太が、「海軍法律」の「勉学」を始めていた明治六
(1873)年の冬、海軍少輔の川村純義が、「ウイーン万博」と
欧米海軍視察の帰路ニューヨークに立ち寄った。その際左
平太は意を決して「責メテ実地之一科ナリトモ」、「華盛頓コ
ロンヒエ(ア)ンノ大学校」(ワシントン D.C. にある大学校)
で「海軍法律」を修得するため、「今ヨリ二ケ年ノ間留学」の
延長を嘆願したが、全く効果がなかった。

この書翰の左平太の文言には、左平太自身再渡米後つい
に大学在学できないまま、帰国しなければならなくなった
絶望と諦めが滲み出ている。この後左平太は「僅かニ三ケ
月」後に、後ろ髪を引かれる悔しい思いの中で、仕方なく命
令に応じて帰朝することになった。明治七(1874)年四月九
日に「ワシントン」を出航、五月十三日に横浜港に到着す
ることになる。

最後に本論では、かなり重複の記述が多く、読みづらか
ったと思うが、あしからず許してもらいたい。

【参考文献】(本号分)

- 山崎正董編著『横井小楠』遺稿編(明治書院、1938年)
山崎正董編著『横井小楠』伝記編(明治書院、1938年)
山崎正董述小冊子『横井小楠先生を偲びて』(熊本縣教育委員会、1949年)「三 小楠先生の生涯」
原玉子(タマ)の「除籍簿」・「墓籍台帳(故横井和子氏提供)」
中川斎著『肥後高瀬藩史』(高瀬藩設置百年記念出版、1969年)
明治八(1875)年七月の「熊本洋学校生徒学科試験各科比較席順表」
細川侯爵家編纂所編『長岡雲海公傳』(民友社、1914年)
熊本県教育委員会編『熊本県近代文化功労者』(熊本県教育委員会、1981年)
細川家編纂所『改訂 肥後藩国事資料』(鳳文書館、1932年初版・1990年覆刻)
佐藤寿良著『ある海援隊士の生涯—菅野覚兵衛伝—』(私家版、1984年)高知県立図書館蔵
『図解高校日本史』(一橋出版、1991年)
「太政官御沙汰書拾遺」五十六(1872年11月、国立公文書館アジア歴史資料センター蔵)
伊藤之雄編著『維新の政治改革と思想——一八六二～一八九五』(ミネルヴァ書房、2022年)
田村栄太郎著『明治海軍の創始者 川村純義・中牟田倉之助傳』(日本軍事図書株式会社、1944年)
中村孝也著『中牟田倉之助伝』(大空社伝記叢書174、1995年)
海軍歴史保存会編『日本海軍史』第1巻 通史 第1・2編(第一法規出版、1995年)
高木不二著『幕末維新期の米国留学——横井左平太の海軍留学』(慶應義塾大学出版会、2015年)
拙論「横井玉子」玉名歴史研究会編『歴史玉名』第20号(1995年)
拙論「二種類の『小楠遺表』—小楠の『痲疾』罹患と『遺表』の背景—」(熊本近代史研究会『近代熊本』第40号、2019年)
拙著「横井小楠と二甥左平太・大平の書翰を読む」全32回(熊本近代史研究会『近研会報』所収「くまもと近代史譚」2016年1月～2018年9月)
拙著『新進「横井小楠」学』全26回(熊本近代史研究会『近研会報』所収「くまもと近代史譚」2018年10月～2021年3月)
拙編「横井小楠同志・門人一覧」(私家版、2011年)
拙編「横井小楠書簡要録」(私家版、1986年)
菅野覚兵衛 - Wikipedia
菅野覚兵衛とは - コトバンク (kotobank.jp)
kaientaidesu.la.coocan.jp/html/taishi5.htm

Letters written by *Saheita*, Yokoi Tamako's husband, and his younger brother *Daihei* before and after their stay in the United States (9): from the archive of the family *Yokoi* in the Kumamoto University

TSUTSUMI Katsuhiko

Yokoi Saheita (横井左平太) went to America again in July 1872. He sent the letter (October. 20, 1973) from Washington D.C. to his family in Kumamoto, Japan. In this letter, I can find the name of “Otama (お多満)” who was Yokoi Tamako (横井玉子), Saheita's wife.

Saheita's aim was to return to Annapolis, but he could not do that. Therefore, he tried to enroll in a naval law course at Washington College. I clarified the how and why of that matter.

Saheita met Sumiyosi Kawamura (川村純義), a high-ranking naval officer (少輔), in New York in the winter of 1873, and told him that he wanted to study naval law for two years, but did not succeed and came back to Japan in May 1874. I can sense Saheita's chagrin in his letter.

Moriyosi Hosokawa (細川護美) came to America to study abroad in April 1872 and stayed at the same house with Saheita in Washington D.C. This letter was written during that time. Thereafter Moriyosi Hosokawa went to study abroad in England. Saheita wanted to travel there too, but he was not permitted to do so by the Japanese government.